

高田遺跡の調査

朝来市教育委員会 埋蔵文化財センター

1、はじめに

高田遺跡は、朝来市と養父市の市境の円山川の右岸に位置します。遺跡が確認されたのは、昭和 56 年度の県道物部養父線の整備に伴って行われた調査です。南側の調査区（今回本発掘調査を行ったB地区側）から、弥生時代後期・奈良時代後半～平安時代前期にかけての遺物が確認されています。

2、調査の成果

今回は南但ごみ処理施設整備事業に伴って調査したものです。平成 16 年度・平成 20 年度の2回にわたって確認調査を行い、県道物部養父線に近い側で、奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構や遺物が確認されましたので、事業に先だって全面調査を行うことになりました。調査は事業対象地の真ん中を流れる河川をはさんで北側をA地区、南側をB地区として実施しました。

<A地区の調査>

東から張り出した2本の大きな尾根にはさまれた扇状地に立地します。開墾が進み、現在ではその多くは植林されている状況でした。

【遺構】

調査区の全域で遺構を確認しています。北側は地山に礫を含んでおり、遺構の量は少なくなっています。柱穴がほとんどですが、その数は多く、明確な掘立柱建物は1棟しか確認できていません。その時期は8世紀後半～9世紀前半と考えています。また、柱穴の中には根石が置かれたものや、柱の木材が残存しているものもありました。遺構からは時期のわかる出土遺物はほとんど出土していないため、遺構の時期が不明のものが増えてきました。

【出土した遺物】

弥生時代後期・奈良時代～平安時代・鎌倉時代のものが確認されています。その中で弥生時代後期のものとして、柱穴から高杯、溝から甕が出土しています。他に、8世紀後半～9世紀、11～12世紀の遺物が出土していて、注目されるものとしては緑釉陶器、中国製の白磁（12世紀後半）や青磁（14世紀前半）などがあります。



A地区 遺構の状況



A地区 柱穴からの弥生土器

高田遺跡B地区の調査

1、調査の成果

◆遺構

【弥生時代の竪穴住居】弥生時代の竪穴住居は円形を呈しています。今回の調査では、このような竪穴住居 6 棟みつかりました。いずれも大部分は壊されており、屋根を地面で支えるための壁溝とよばれる部分が残るのみです。もっとも遺存状況のよい竪穴住居 4 は、直径 9m40cm を図る大きな建物で、その周囲に直径約 6m に復元できる、やや小さめの建物が営まれていたようです。

一次に人々がここで生活を営んだのはそれから約 200 年後のことです。

【古墳時代の竪穴住居】古墳時代の竪穴住居は方形を呈しています。弥生時代の竪穴住居が埋まったあとに壁溝をもうけ、建物を構築したようですが、これらも、奈良時代以降の整地などによって大半が破壊されており、全体の規模がわかるものは調査区北東部でみつかった竪穴住居 11 のみです。ちなみに、この住居は一辺 4m を測ります。また、竪穴住居 10 では床として利用していた面から土師器甕が出土しています。その形態や法量から、6 世紀前半代に比定できます。その後、背後の山が墓地として利用されることとなったためでしょうか、それ以降の生活

【古墳時代の素掘り井戸】調査区北端付近でみつかった 3 基の素掘り井戸は、いずれも、井戸底から 1m ほどが遺存しています。うち 1 基は現代の造作によって壊されています。近くに円山川が流れてはいますが、増水時や衛生面からも、井戸水のほうが安全であるといえます。しかし、奈良時代以降の土器を含む井戸はみつかっておらず、当地における、古墳時代以降の給水事情は不明のままです。

—それから約 100 年、この地が高田古墳群の墓域であるという感覚が薄れてきたのでしょうか、またこの地で人々が活動を始めたようです。

【飛鳥時代の川】弥生時代の竪穴住居 4 の東側でみつかった飛鳥時代の川は、その真上を奈良時代の川が流れたうえ、後世の土石流により大半が消滅し、最下層のみが残っています。川底からは須恵器杯身と土師器甕各 1 点が出土しています。とくに、須恵器杯身の内面には漆膜が前面に残っています。これは、漆塗りを行う際に、パレットとして利用したものです。この河川以外に、明確に飛鳥時代の遺構であると判断できるものはみつかっていません。

【奈良時代の川】調査区中央を流れる東西方向の川の南側にある奈良時代の川は、上流のみが遺存しています。その下流は飛鳥時代の川と同様、後世の土石流に流されています。この川は、先端は非常に浅いのですが、途中でぐんとその幅と深さが大きくなります。また、川の規模が変化する部分だけは深く掘り込んでいます。それよりも下流では掘り込みも浅く、土器の出土量もごくわずかです。おそらく、本遺構で一番重要な部分は、この河川規模の変換点となった部分だといえそうです。漆記号をもつ土器（別項にて詳細をのべます）が多量に出土したことから、ここで、祭祀をおこなったと考えられます。

【奈良時代・平安時代の掘立柱建物】

今回の調査では、少なくとも 8 棟の掘立柱建物を検出しました。大きな建物は調査区の北半で、比較的小規模な建物は南半でみついています。とくに前者については、比較的整然と並んでおり、規格をもって建てていることが伺えます。残念ながら、柱穴からは土器がほとんど出土していませんので、詳細な造営時期をきめることはできません。今後、さらなる検討をおこないたいと考えています。

【その他の遺構】 平安時代の塀や溝、土壇墓などがあります。塀は東西方向に1条、南北方向に1条設けられており、うち前者については、塀を壊した際に土器を埋納しています。この土器は8世紀後半代にその年代が求められるので、それ以前に利用されたものだということがわかります。この塀以外に明確に時期がわかるものはほとんどありません。

◆遺物

今回の発掘調査では、多量の資料が出土しました。本調査区でもっとも古い時期の資料は、弥生時代はじめ頃（紀元前3世紀ごろ）の甕形土器1点です。わずかですが石器剥片も出土しています。今回の調査では、当時のものだと判断できる遺構はありませんでしたが、周辺に稲作開始期の遺跡が存在する可能性があります。その次に古い資料は、弥生時代後期（紀元後3世紀ごろ）の土器類です。高杯、甕、鉢などが出土しています。これらはおもに竪穴住居検出面から出土しています。その後に続く、古墳時代はじめごろの土器はわずかに土師器甕などがあるのみで、竪穴住居10の床面から出土した土師器を含めても、古墳時代の土器類はかなり少ないといえます。

さて、今回の調査でもっとも多く出土したのは奈良時代・平安時代の土器類です。中には灰釉陶器や緑釉陶器、黒色土器もわずかに含んでいます。さらに、圈脚硯も出土しています。この時期の資料は、全体的に杯皿類といった食器が多く、ナベや甕のような煮炊具が少ない傾向にあります。炊事場は調査区外にあるのかもしれませんが。

鎌倉時代以降になると、青磁や白磁がわずかにあるのみで、遺構・遺物ともにほとんどみつかりません。調査区南方では土石流も起こっているため、生活の場として利用されなかったのかも知れません。

【漆記号をもつ土器】

調査区南方にある奈良時代の川からは、たくさんの土器が出土しました。おもな器種構成は、須恵器杯（身・蓋）、甕、土師器甕です。特に須恵器杯の出土量が他器種を圧倒しています。そしてこの須恵器杯、一部に漆で施された記号が見受けられるのです。その点数は現在のところ40点、記号の種類は5種類（「H(I)」「N」「D(O)」「L」「本」）を数えます。この漆で記号を施した土器とは、いったい、どのようなものだったのでしょうか。

まず、兵庫県下の遺跡における出土例を挙げてみましょう（表1）。兵庫県下では高田遺跡以外に11遺跡で漆記号をもつ土器が出土しています。その内訳は7遺跡が古墳（横穴式石室）、2遺跡が川道や溝（のそばの包含層）、1遺跡が散布地となっています。但馬地域の古墳（横穴式石室）出土例がほとんどであることが最大の特徴といえます。古墳出土例については、石室内での葬送儀礼にかかわる資料であることがわかります。いっぽう、七日市遺跡出土例は高田遺跡出土例とほぼ同様の出土状況です。また、両遺構とも、須恵器杯類が器種構成の大部分を占めている点も似ているといえます。したがって、今回出土した資料も水辺における祭祀（※祓）具の一種であると考えられます。ただ、七日市遺跡の旧川道出土資料が「十（じゅう）」と読めるため墨書土器と同様の理解ができる点、斎串や木製船形などの祭祀具も比較的多く出土したという点が異なります。高田遺跡出土例は記号のみであるため、前者とはその性格にも差異があると考えられます。少なくとも、この地に住んだ人々が、古墳時代以来の祭祀をアレンジして律令祭祀具に採用している可能性が考えられます。いずれにせよ、類例が増加し、十分に検討を重ねることができる日を待たねばならないようです。

※祓（はらえ）・・・身の回りの悪い要素を、人形や馬形といったものに移らせて、流してしまう祭祀。

2、まとめ

今回の発掘調査では、これまでの調査に加えていくつかの新しい発見がありました。おもな発見は、

- ①弥生時代前期、とくに稲作開始期の遺跡が周辺に存在する可能性が出てきたこと。
- ②弥生時代終わりごろと古墳時代中ごろには集落として機能し、背後の山に古墳群が造られた頃には生活場所として活用していなかったこと。
- ③奈良時代以降、2度にわたる整地を行い、平坦な面を作ることで生活場所を確保し続けていたこと。

④圈脚硯や施釉陶器といった高級な品を持つ人がいたこと。

⑤その人たちは、須恵器杯類に漆で記号をつけて祭祀を行っていたこと。

などがあげられます。

また、朝来市北部ではほとんど行われていなかった大規模な集落遺跡の調査が行われたことは、大変有意義であったと思われます。今後の調査成果とともに、朝来市ひいては但馬地域に暮らした人々の歴史が少しでも明らかになり、私たちの財産となることを望んでやみません。

番号	遺跡名	所在地	出土した遺構	時期	器種と個数	記号
1	知見1号墳	香美町村岡区長瀬字知見	横穴式石室	7C後	杯B 2点	×
2	文堂古墳	香美町村岡区寺河内	横穴式石室	7C初	杯H 12点 杯G 8点	×
3	畑山遺跡	豊岡市但東町畑山	表面採集・散布地	7C中	杯G	×
4	砂入遺跡	豊岡市出石町袴狭字持アミ	南北溝周辺	9C前	杯A 1点	○
5	東家の上3号墳	養父市八鹿町小山字東家の上	横穴式石室	7C中	杯G身 2点 1点	×
6	西家の上2号墳	養父市八鹿町小山字西家の上	横穴式石室	7C初	杯身 杯蓋	不明 不明
7	穴ヶ谷西11号墳	養父市養父町大藪字穴ヶ谷	横穴式石室	7C前	杯G身	×
8	森地区の古墳	養父市養父町森	横穴式石室か	7C前	杯A 1点	×
9	三保土戸遺跡	朝来市山東町三保字土戸	表面採集	8C前	杯B(漆書) 1点	寺カ
10	高田遺跡	朝来市和田山町高田	河川	8C後	須恵器杯類 40個	別記
11	宮内中山6号墳	朝来市和田山町宮内	横穴式石室	7C前	須恵器杯H蓋 2点	
12	七日市遺跡	丹波市春日町七日市	旧川道	8C中	杯B蓋(漆書) 1点	十

表1：兵庫県下における漆記号をもつ土器一覧
(谷本1992を参考に、加筆修正を施したものです)

【参考文献】

井守徳男 1991 『七日市遺跡（I）—近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書（XII-3）—』

兵庫県教育委員会

谷本進 1992 『西家の上古墳群』 八鹿町教育委員会



漆記号をもつ土器（南より）



奈良時代の川・完掘状況（北より）